

# コミュニケーション文化学演習における学生の 研究テーマの傾向

● 吉澤京子

平成18年度教育課程の完成年度から4年、平成24年度には新しいカリキュラムで学ぶ学生が後期課程に進級してくる。平成22年度教育課程においては、文学部の3年生が学ぶ「演習Ⅰ」は通年2単位、4年生が学ぶ「演習Ⅱ」は卒業論文・卒業研究を含む形で通年4単位の科目となる。新教育課程で、コミュニケーション文化学科にとって最大の変化となるのが演習のクラス編成である。すなわち、当学科ではこれまで文学部で唯一、演習にⅠとⅡの区別がなく、3,4年生の混成クラスで授業が進められていたものが、新教育課程では他学科と同様の「演習Ⅰ」と「演習Ⅱ」という学年別のクラス編成が実施されることになるのである。(ただし旧課程の「演習」と新課程の「演習Ⅰ」が対応科目とされるため、平成24年度では、3,4年生混成クラスの体制をとる)。

新教育課程への移行期にあたり、新教育課程での授業改善をめざして、拙稿ではこれまでの「演習」の授業を振り返り、問題点をいくつか指摘したうえで、学生の研究テーマの傾向と学修意欲について若干の考察を加えたい。

## 1. 平成18年度教育課程における「演習」の概観

### i) 平成20年度および21年度

平成20年度は平成18年度教育課程の後期課程初年度で3年生が在籍するのみであったので、「演習」も1クラスあたりの人数が少なかったため目が行き届き、学生一人当たり年2回の研究発表が十分にできる時間的余裕を享受した。その一方で、学生には手本となる上級生がいないためより自律した学習態度が求められた。

翌平成21年度から3,4年生の混成クラスがスタートした。年度はじめに数名の4年生に、前年度の研究成果のプレゼンテーションを行わせ、3年生が自らの研究テーマを探するにあたってのヒントや刺激を与えることができた。この年度も春学期・秋学期それぞれに1回ずつ発表をするように運営したが、やはり人数が前年比2倍以上になったため、一人当たりの指導時間、研究発表スケジュールがタイトになるのは避けられなかった。

ところでこの学年には、3年次の演習の単位が未修得のため2つの演習を履修する、いわゆる「並行履修」の4年生をはじめと見ることとなった。筆者のクラスにもそのような学生が1名いたが、危機感もあってか非常に熱心で研究発表も積極的に取り組み、無事卒業させることができた。その学生にとって、当演習の分野は未知のものであったはずだが、クラスに違和感なく溶け込めたのは同学年の学生がいることが幸いしたのではないだろうか。逆に、学年別クラスとなる新教育課程の演習では、このような学生へのフォローが新たな課題になるかもしれない。

### ii) 平成22年度および平成23年度

この2つの年度においては30名強のクラス編成が続き、おおむね出席率も良く順調に推移した。平成22年度の春学期は病欠の演習担当教員のクラスの学生を3つの演習に振り分けて授業を実施したのだが、筆者のクラスも6名の学生を受け入れて40名の大所帯となった。当該学生には本来

の演習担当者の指導で研究テーマ（異文化コミュニケーションの分野のさまざまなテーマ）があらかじめ割り振られていたため、そのテーマで研究発表を実施するよう指導したところ、全員が滞りなく発表することができ、研究テーマの多様性という点で筆者のクラスの学生にも良い刺激となったようである。しかし、この経験により大人数での演習における目配りの限界を感じたことは否めず、学生に授業の趣旨を浸透させて十分な指導を行うためには、やはり1クラス25名以下が望ましいと痛感した。

平成23年度の3年生については、前年度末の履修希望調査時に小論文と面接による選抜を初めて行った。これは、過去の学生の中にはこの授業で扱う「視覚コミュニケーション」という分野について理解が必ずしも十分でない状態で履修したために、自分の研究テーマがなかなか絞り込めなかったり、学修意欲そのものが減退してしまうケースが若干認められたからである。ところがいざ授業が始まってみると、3年生が選ぶ発表テーマの中には視覚コミュニケーションの分野から逸脱したものや、他の学科の授業で扱われる学問領域に近接するものも見受けられ、選抜の効果は限定的であったと認めざるをえない。

次に具体的に、学生の研究テーマの傾向を直近の2年間について報告し、今後に向けての課題を考えてみたい。

## 2. 学生の研究テーマの傾向

シラバスにも掲げているように、筆者の「演習」では視覚イメージを使ったコミュニケーションの多様性について知識の幅を広げることを目的としている。毎年、5月末までの授業では、視覚コミュニケーションとは何か、他のコミュニケーション手段とはどのように違うのか、どのような事例があるのかを紹介する講義に充てている。

学生もまたそれらを軸に自らの研究テーマを探していくことになるのだが、最終的な研究テーマ、すなわちパワーポイントを使った発表および秋学期末に提出することになる小論文のテーマは、視覚コミュニケーションへのアプローチの仕方により、おおざっぱに次の5つのカテゴリーに分類できる。

- A 視覚デザイン、工業デザインの分野（記号、標識、パッケージデザインなどを含む）
- B 色彩の分野
- C 美術の分野
- D 映画、アニメ、劇画等の分野
- E その他

平成22年度および23年度履修者の研究テーマの分布は以下の通りである。

平成22年度（履修者34名）

- A……………13名（38.2%）
- B……………4名（11.8%）
- C……………5名（14.7%）
- D……………1名（2.9%）
- E……………11名（32.4%）

平成23年度（履修者33名、発表を行った者32名）

- A………… 8名 (25%)
- B………… 9名 (28.1%)
- C………… 4名 (12.5%)
- D………… 2名 (6.3%)
- E………… 9名 (28.1%)

単年度ごとに割合の振れはあるものの、デザインと色彩に関するテーマだけで全体の50%近くあるいはそれ以上を占めていることがわかり、学生の興味身近なものデザインや色に向かっていることが察知される。反対に、美術の分野では歴史的な文脈において視覚イメージをとらえる美術史的観点からの研究は少なく、それはある意味で、人文学科が想定している学問領域と当学科のそれとの差別化がうまく機能していることを示しているといえよう。意外だったのは、映画やアニメーション、劇画等の分野がきわめて低い値を示していることである。

デザインや色彩の分野に学生の興味が集中する理由の一つとして、これらの分野が、学生が就職を希望する職種、すなわち、インテリア・コーディネーターやアパレル産業、化粧品の販売等の仕事で求められる実践的な知識を提供するものであることが考えられる。視覚コミュニケーションの分野でも、「役に立つ」分野に手がでてしまうという、学生の実学志向を示していると言えるのではないだろうか。また、研究に用いる資料についても、当該分野では専門書以外にも概説書や、とくに色彩については検定試験向けの参考書などが多数刊行されており、ネット上の情報量も多く、学生にとって簡単に入手できることもテーマ選択の理由の一つではないかと思われる。

ところで、上記の分布からは直接は見えないことであるが、今後の指導上の課題と思われる現象が毎年のように見られる。それは、3年次と4年次で研究テーマの領域を全く別のものに変える学生が必ずいるということである。3年次に「飲料水のパッケージデザイン」をテーマに充実した研究を行った学生の4年次のテーマは「テレビコマーシャル」、3年次で「顔文字」について世界中の事例をこつこつと集めて発表した学生が4年次ではある展覧会のカタログの一部をなぞる研究レベルににとどまる、というように一つのテーマを掘り下げずに別の領域に移ってしまうケースがそれである。問題と思われるのは、新たなテーマでの研究が、往々にして内容の深さや緻密さ、モチベーションの高さにおいて、前年度に比べて低調の傾向があることである。

教員の指導力不足といわれてしまえばその通りなのだろうが、この現象は、現在の学生が受けてきた「ゆとり教育」にも遠因があるのではないかと考える。最近の学生は他の学生と比較され優劣をつけられることに極端に敏感に反応する傾向がある。それと同じ理由で、複数の学生が同じテーマに興味をもったとしても、先に誰かに発表されてしまうと研究テーマの重複をも避けようとして、他のテーマを求めてさまよい、結果的に学修意欲の減退をきたすのではないだろうか。先にあげた分布で、「その他」が全体の3割となっていることも、同じ理由で説明が可能かもしれない。

このことは、「演習」がⅠとⅡに分かれ、Ⅱが卒業論文・卒業研究を含んだ演習となる新教育課程では真っ先に克服しなければならない課題であろう。2年間一貫して研究を続けられるテーマの設定を学生に行わせることが、とりわけ研究を開始する3年次生にたいしての指導上の重要なポイントとなると思う。時間をかけ、丁寧に、個々の学生にとってふさわしいテーマが設定できるよう目配りをするとともに、研究を遂行するうえで困難に直面した学生に対しては、適切なアドバイスを与えて困難を乗り越えられるよう指導していきたいと思う。